

## 「歌(句)物語を作ろう」

「奥の細道」(紀行文)と「伊勢物語」(歌物語)を読んだ。どちらも歌(句)が中心で、その歌(句)にピーク(カタルシス)を持ってきて、その場面の心情が集約されていたり、その歌(句)によって転換があったりというものである。

この単元ではオリジナルの歌物語を作ることをする。歌や句は教科書に載っているものを1つ選び、その前後のストーリーは全くの創作で自分で勝手に作ってみようという課題だ。いかに創作したストーリーとその歌や句をマッチさせるか、または、いかに創作ストーリーとその歌や句との絶妙なギャップを演出できるかを目指して創作しよう。

### 【フォーマット】

歌(句)は教科書から見つけ出す。(現代・古典問わない)  
ストーリーは四〇〇字〜八〇〇字程度 **黒ペンで清書する**  
イラストを付けても可

【期限】授業時間3〜4時間を費やす。

【発表】対面もしくは紙面での発表を計画している。

以下に過去に生徒が創作した作品を紹介します。

とある仲のいい男女がいた。二人は小さい頃からずっと一緒に先日つきあうことになった。二人は一日一日がとても楽しく過ごしていた。ある日、その女性の方が暗い室で泣いていた。とても虚無感と絶望が胸の内にあった。彼は私の前から姿を消した。別れさえもなく突然になくなってしまった。携帯もつながらない。私はひとりぼっちになってしまった。あんなに愛し合っていたのに、姿を消したこと自体許せないけど、何も言ってくれなかったことも許せない。愛していたからこそ憎い。憎まなければいけなくなつた自分の心がつらい。どうしてこんな不幸になつてしまったのだろうか。彼に出会わなければこんなことにはならなかったのか……。といって詠んだ歌。

逢ふことの絶えてしなくはなかなか人をも  
身をも恨みざらまし

ヨーロッパでの秋で、留学していた日本人が足を引かずながらある背の低いおじいさんに公園で出会った。お互いに一人であつたためか、目が合い、ベンチに座った。留学している日本人はまだまだあまりその地の言語を使いこなせず、いた。そのとき、おじいさんはぺらぺらと話し始め、日本人はその話について行くだけで精一杯だった。しかしそのおじいさんの表情を見ると、何かを背負つたような顔をしていた。日本人は長い人生の中で、きつと大変なことがあつたんだろうと思ひ、切なくなり、少しのお金を渡した。すると、急におじいさんは立ち上がり足のけががなかったかのように長い長い夜を告げる闇の中へ走り去つていった。「今夜語り明かす予定だったのに、今夜も一人かもね。」果たしておじいさんは何を言いたかつたのか。

あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし  
夜をひとりかも寝む

四月某日。

今日は職場の同僚と飲み会。お酒に強くない私は、一杯を飲み干した時点でも薄手に真っ赤になつていた。お酒も入り、うとうととしてきた私は、寄りかかるものがほしく「ああ……枕がほしいなあ……。」と呟いたらしい。すると隣にいた男性がそつと枕を差し出した。このときおそろく、お酒に酔つていた私は、その腕枕で爆睡したのだろう。誤解を解くため、この話をしたのも何回目だろうか……。と言つて詠んだ歌。(悪い噂が立つてしまうのは残念だ。)

春の夜のゆめばかりなる手枕にかひなく立た  
む名こそ惜しけれ

家の庭の松に、ほととぎすが止まった。そして、離れてしまう。まるで彼女のように。彦星はずつと思つていた。織り姫と一年一回しか会えないということを。七月七日……この前会つたのに、会いたいという思いが胸を焦がす。あと一年も待たなければならぬのだろうか。だが彦星はわかつていた。お互いの気持ちは変わらないことを。もちろん織り姫も……。だから彦星は思う。りんとして誇らしくまとう。彼女のために……。松のよ  
うに……。といつて詠んだ歌。

たちわかれいなばの山の峰に生ふるまつとし  
きかばいま帰りこむ